＜小学校国語＞

語彙を豊かにする学習指導の工夫

～「言葉のたからばこ」を活用した言語活動の充実を通して～

うるま市立天願小学校教諭　比屋根　直子

Ⅰ　テーマ設定の理由

現代社会は、「知識基盤社会」と言われている。そのような、情報化・グローバル化の中を生きていくためには、変化する社会の現実としっかり向き合い課題の解決に立ち向かう力、主体的に生きていく力を学校教育活動全体で子ども達に身に付けさせることが求められている。

新学習指導要領解説国語編では、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」ことを目標にしている。その中でも「語彙」は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤をつくる言語活動を支える柱である。

本校は、全国学力・学習状況調査や県到達度調査・うるま市実力テストにおいて、読解力や文章構成力の弱さが課題として挙げられている。また、低学年においては、「文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること」が課題としてみられた。学級の実態調査（７月）では、「国語の学習が好き(17)どちらかというと好き(7)」と答えた児童が８６％と半数を大きく超えているが、反面「どちらかといえば嫌い(1)嫌い(3)」と答えた児童は１４％であった。その理由は、「時間内に書き終えない」「書き方がわからない」と「書くこと」に苦手意識が高いことがわかった。また、「自分の考えを話すとき、相手にわかりやすく話そうと工夫していますか」では、「できる(16)だいたいできている(5)」と答えた児童が７５％、「どちらかといえばできない(4)できない(3)」と答えた児童が２５％であった。その理由として、「学級のみんなの前で発表は緊張する」「間違っていたら恥ずかしい」等尻込みしている実態がわかった。そこで、児童の実態に応じて言語環境の工夫改善で、たくさんの言葉に触れる環境、「書く活動」の抵抗を和らげるために、読む相手に対し、自分の考えや思いを伝え合うことができる学習指導の工夫の必要性を感じた。

これまでの実践では、全体的に教師主導の授業で、読み取りが多く、教師の発問の工夫に、ゆさぶりの発問の工夫が弱かった。また、ペアーや小集団で互いの考えや思いを話したり聞いたりしたが、双方向での伝え合いまでには達しなかった。そのため、他者の意見が生かされず、読みの深まりや多様な考えまでに至らなかったように考える。このような課題を解決するためにも、児童に「言葉に着目する」、「表現に生かす」という目的をもって文章を読んだり、読む相手に書いたりしながら、自分の考えや気持ちを言葉で伝え合う喜びを味わわせることが自分の実践に求められていると考える。

そこで本研究では、語彙を豊かにするための学習指導の工夫として、文学的文章の学習において「ことば」を意識させ、相互交流活動を取り入れながら自分の考えや思いをもち、互いの考えを伝え合う力を育成することを目指したい。そのために、文学的文章の学習や日常生活に使う重要な語彙を自作の「言葉のたからばこ」に書き留めたり、使用する語彙を表現したりする機会を多く取り入れたい。以上のことから、言葉による見方・考え方を適切に表現する活動に繋げることにより、自分の考えや思いをもち語彙を豊かにすることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

「言葉のたからばこ」を作成し、児童自らが様々な語彙を習得し、言語感覚（正誤・適否・美醜等）を養う活動を通して、語彙を豊かにする学習指導の工夫を研究する。

Ⅲ　研究仮説

1　基本仮説

文学的文章の学習において　「言葉のたからばこ」を作成し、叙述や挿絵等を手がかりに自分の考えや思いを適切に伝え合う活動を通して、語彙を豊かにすることができるであろう。

2　具体仮説

(1)　文学的文章の学習において、「言葉のたからばこ」に書き留めながら、習得した言葉を使うこ

とにより、言葉を手がかりにした語彙や言語感覚の動作化等を通して、自分の考えや思いを適切に伝え合う活動ができるであろう。

(2)　日常的な場において、言葉を集め「言葉のたからばこ」へ書き留めることを通して、新たな言語感覚（正誤・適否・美醜等）を養い、言語活動で使う語彙を豊かにすることができるであろう。

Ⅳ　研究構想図

【国語科で身につけたい力】

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する。

【児童の課題】

○言葉の働きや助詞の定着が弱い。
○自分の考えや思いを言語化する説明が弱い。

【めざす児童像】

○日常的に国語を学ぶ楽しさに気付き、語彙や言語感覚を養い、表現に活かすことができる児童
○新しい語彙や言語感覚を養い、言葉を楽しみながら日常生活に生かすことができる児童

【研究テーマ】

語彙を豊かにする学習指導の工夫
～「言葉のたからばこ」を活用した言語活動の充実を通して～

【研究目標】

「言葉のたからばこ」を作成し、児童自らが様々な語彙を習得し、言語感覚（正誤・適否・美醜等）を養う活動を通して、語彙を豊かにする学習指導の工夫を研究する。

【基本仮説】

文学的文章の学習において「言葉のたからばこ」を作成し、叙述や挿絵等を手がかりに自分の考えや思いを適切に伝え合う活動を通して、語彙を豊かにすることができるであろう。

【具体仮説】

(1) 文学的文章の学習において、「言葉のたからばこ」に言葉を書き留めながら、習得した言葉を使うことにより、言葉を手がかりにした語彙や言語感覚の動作化等を通して、自分の考えや思いを適切に伝え合う活動ができるであろう。

(2) 日常的な場において、言葉を集め「言葉のたからばこ」へ書き留めることを通して、新たな言語感覚を養い、言語活動で使う語彙を豊かにすることができるであろう。

【理論研修】

○言葉による見方・考え方
○主体的・対話的で深い学び
○「問い」が生まれる
　　授業サポートガイド
○国語科の授業づくり
○語彙指導

【検証授業】

○実態把握（アンケート）
○言葉のたからばこ作成・評価
○児童の活動・つぶやき等
○検証授業（2 回）

○並行読書　○掲示教育

市具体的実践9項目

【研究のまとめ、研究の成果と今後の課題】

Ⅴ　理論研究

1　テーマと新学習指導要領との関連

(1)　小学校国語科で育成を目指す資質・能力

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（平成 28 年 12 月）では、子供たちに育成すべき資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」三つの柱に整理された（表 1）。また、平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領では、国語科において育成を目指す資質・能力が「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定された。

表１　国語科において育成を目指す資質・能力の整理(1)

国語科において育成を目指す資質・能力の整理　別添２－１

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
○言葉の働きや役割に関する理解 ○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け ・書き言葉（文字）、話し言葉、言葉の位相（方言、敬語等） ・語、語句、語彙 ・文の成分、文の構成 ・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章の関係） など ○言葉の使い方に関する理解と使い分け ・話し方、書き方、表現の工夫 ・聞き方、読み方、音読・朗読の仕方 ・話合いの仕方 ○書写に関する知識・技能 ○伝統的な言語文化に関する理解 ○文章の種類に関する理解 ○情報活用に関する知識・技能	国語で理解したり表現したりするための力 【創造的・論理的思考の側面】 ➢情報を多面的・多角的に精査し構造化する力 ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化 ・論理（情報と情報の関係性：共通ー相違、原因ー結果、具体ー抽象等）の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 ➢構成・表現形式を評価する力 【感性・情緒の側面】 ➢言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 ➢構成・表現形式を評価する力 【他者とのコミュニケーションの側面】 ➢言葉を通じて伝え合う力 ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解 ・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り ➢構成・表現形式を評価する力 ≪考えの形成・深化≫ ➢考えを形成し深める力（個人または集団として） ・情報を編集・操作する力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力	・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度 ・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通して、心を豊かにしようとする態度 ・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度 ・我が国の言語文化を享受し、生活や社会の中で活用し、継承・発展させようとする態度 ・自ら進んで読書をし、本の世界を想像したり味わったりするとともに、読書を通して様々な世界に触れ、これを擬似的に体験したり知識を獲得したり新しい考えに出会ったりするなどして、人生を豊かにしようとする態度

2

(2)「言葉による見方・考え方」について

新小学校学習指導要領国語科解説では、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」と示している。さらに「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられた言葉そのものを学習対象としている」とし、国語科においては、言葉に着目することが重要視されている。そこで、言語指導において田近洵一（1993）は「言語に関する意識や知識が、的確な言語活動を支えている。特に、言語知識の習得を支えるのは、言語に対する意識や関心である。」ことを挙げ、小池良太郎(1993) は、「声に出して読む学習、ことばを集める学習、他のことばに入れ換える学習等の学習は、究極的に言語感覚の高揚へとつながっていく。」と述べている。上記を踏まえ、本研究との関わりを以下(表２)のように整理した。

表２　研究における「言葉の見方・考え方」の場

言葉による見方（視点）を働かせる場面	言葉による考え方（思考）を働かせる場面
・言葉の意味、働き、使い方等に着目し、「誰が何をしたのかという主語と述語の関係」で文学的な文章が読めることができるやりとりをする場面。（教師） ・話や文章を捉える「会話文」や「語り文」等に着目して捉えたり問い直したりして「言葉のたからばこ」の言い換え表を活用したりする場面。（児童）	・話や文章に表れる対象と言葉、言葉と言葉の関係等、文章の場面構成や挿絵を動かしながら、児童の思考の流れをプラス・マイナスの対比効果で思考・判断する場面。（教師） ・話や文章の内容や表現について適切な表現（正誤・適否・美醜等）がないか吟味する場面。（児童）

(3) 言語感覚について

言語感覚については、「新小学校学習指導要領国語科解説」（平成 29 年 6 月公示）において「言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜等についての感覚のことである。話したり聞いたり書いたり読んだりする具体的な言語活動の中で、相手、目的や意図、場面や状況などに応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直感的に判断したり、話や文章を理解する場合に、そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えりすることができることである。」とまとめられている。また、『国語科授業の新展開 50』の中で瀬川英志（1993）は、「言語の教育」として助詞をいかした言葉を通して思考・創造力を働かせ、活動を通して表現・理解することにこだわることを挙げ、言語感覚の定義として挙げている。本研究では、個が個の読みとして確認できる指導を工夫し、「言語感覚は、言葉の正誤・適否・美醜等について考える能力」として考える(表３)。

表３　「言語にこだわり、吟味する活動」

場　面	言語にこだわり、吟味する活動
文章読解	①　文章に出てくる語句に着目し、場面の様子を想像する。 例・「かさこじぞう」:「このじぞうさまはどうじゃ。はなからつららを下げてござらっしゃる」→「つらら」の写真掲示→寒そう ②　挿絵から読み取れる情景描写で主人公の心情、生活の様子のイメージを描かせる。 例・「アレクサンダとぜんまいねずみ」 「古いおもちゃばこがたくさんこのはこにすてられたんだ（略）」 アレクサンダは、なかんばかり。 ③　場面の情景描写で動作化を入れ、主人公の心の状態を発現させる情感の働きを動作化で表現したり心情曲線で書き表したりする。 例・「かさこじぞう」: 主人公の行動から考える。 「とんぼりとんぼり」（下をむいてかなしそうな動きで歩く。）→「やっとあんしんして、うちにかえりました。」
感想まとめ・交流	①　国語日記に、「言葉のたからばこ」でカテゴリー分けした感情を表す「感想観点表」をみながらで知った語彙を自分の考えや気持ちをいれながら、書き残す。 例「かさこじぞう」:「つけなかみかみ」→「つける」「かむ」の動きで、じさまとばさまの貧乏な生活がわかった。 ②　感想発表・交流の中で、適切な表現（正誤・適否・美醜等）がないか吟味したりする。 例 :「アレクサンダとぜんまいねずみ」:「かわいそう」「友だちおもい」「～のようだ」

２　国語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

東京教育研究所(2018. 3 月)の資料を参考にし、本テーマ「語彙を豊かにする学習指導の工夫」を３領域がどのようにしているかについて授業改善の視点(○)を活動の視点(☆)にして示した(図 1)。

深い学び

○言葉の面白さや大切さに気づき、実感できる学習。
☆「話すこと・聞くこと」: 根拠を明確に、自分の考えを話すことができる。
☆「書くこと」: 体験したことや感想等を自分の考えを通して適切に言葉にして書くことができる。
☆「読むこと」(文学的な文章)
・情景や登場人物の心情を豊かに想像し、主題等について考えがもてる。
・文章や言葉のよさに気づき、交流することができる。

主体的な学び

○　言葉の学習として、単元を通して意欲的、主体的に課題解決を図る学習。
☆　見通しのもてる学習計画を立てることができる。
☆　様子を表す言葉に着目することができ、「言葉のたからばこ」に書き留め、表現活動で使うことにより、学校生活の中で育むことができる。
☆　活動を振り返ったり、友達同士共有したりする。

対話的な学び

○　自分の考えをもつ時間をとり、誰もが交流時間に意見を伝えることができ、考えを広げながら、表現を高める学習。
☆　交流場面において、身近な言葉や自分にとって思い入れのある言葉について自分なりの意味を生み出したり、その言葉を使った用例を書いたりすることができる。
☆　接続語等に着目して、話の前後の段落を吟味し、理由や根拠等を使って多様な考えを実感することができる。

図１　本テーマと主体的・対話的で深い学びとの関連（一部抜粋）

３　語彙力の育成について

(1) 語彙力について

「語彙」とは、言葉の基本となる単位の一つである語を、その一つ一つの語としてではなく、語全体をまとまりとしてみる名称である。語彙指導の目標には、語彙量の拡充が挙げられる。児童が話したり書いたりする等の表現するときに使える語彙（使用語彙）と、話を聞いたり本を読んだりする等で知っている語彙（理解語彙）と異なる捉え方をする必要がある。文部科学省は「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」の中で、「思考そのものを支えていく語彙力の育成を重視していくことが必要である。」と明記している。また、村石昭三（1993）は「ことばに目を向け、そのおもしろさに目をひらくこと、そしてことばを勉強することのおもしろさを経験させること、それが、やがて言語の体系的な学習の土台となる。」と述べている。

そこで、この研究では、ことばの学習の視点として、児童の発達段階を考慮し、児童が言葉のおもしろさや不思議さを感じて、楽しく語彙を獲得できるような指導の工夫改善を考える。

(2) 「語彙指導の改善・充実」に関する系列

《低学年の語彙の不足が後の学力差に影響》という課題に対した、語彙を豊かにすることに関することを新学習指導要領解説では系列で示している。すべての教科等の資質・能力の基盤となる言語能力を支える重要な要素であるとし、語彙を量と質の両面から充実させることが重視されている。具体的には、「話や文章の中で使える語句を増やすとともに、(略) 語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高める」ために、各学年において、指導の重点となる語句のまとまりが系統化して示された(表４).

	第１学年及び第２学年	第３学年及び第４学年	第５学年及び第６学年
量を増す	身近なことを表す語句のまとまり	様子や行動、気持ちや性格を表す語句のまとまり	思考に関する語句のまとまり
質を高める	・意味による語句のまとまりがあることに気付くこと	・性質や役割による語句のまとまりがあることを理解すること	・語句の構成や変化について理解すること ・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと

小学校のまとめとして、求められている事項。
中学校国語科における語彙指導の基盤となる。

表４　語彙指導の系統化

(3) 語彙指導の取り組み

文及び文章を書く重要な活動として感想・評価語彙の指導として、「国語科学習基本語彙」「感情」＜情緒・情動・信念・情操・表情・身振り＞などの項目関連を参考に、「感想観点表」作成した（表５）。感想の語彙を与えることにより、日記や生活文等で活用し、正誤・適否・美醜等の言語感覚を「使えるようにしたい言葉」として、教師と児童とのやりとりで出し合い、教師がカテゴリーわけをして、「言葉のたからばこ」として活用を図る(表６)。

表５　感想観点表

感そうのかん点表

よろこび	おどろき	いかり	かなしみ	音や様子をあらわす言葉
うれしかった	おどろいた	はらがたった	かわいそう	ぎ音語（耳）
気持ちよかった	どきっとした	かんかん	じいんとなった	ぎ態語　（目）
うきうきした	びくっとした	むっとした	さびしい	
かんどうした	ぽかんとした	がまんできない	ないてしまいそう	つなぎことば
しあわせに思った	ぎょっとした		しんみりした	
うつとりした	いきがとまりそう		心細くなった	
わくわくした	目をぱちくり			

表６　使えるようにしたい言葉

使えるようにしたい言葉

用いてうれしくなることば	やさしくなることば	やる気になることば
ありがとう	うれしい	いっしょうけんめい
いただきます	えがおいっぱい	いきいき
いってきます	思いやり	がんばろう
おはようございます	きれい	かっこいい
おやすみなさい	げんこう	グッド
こんにちは	しんぱい	せいいっぱい
ごめんなさい	すてき	たのしい
さようなら	そんけい	チャレンジ
しつれいします	ともだち	でいねい
すみません	なかよし	にこにこ
	なかよし	のびのび
嬉しきがね	にっこり	はきはき
おいしい	ぬくもり	わっしょい
おおおろしくドキドキする	へいわ	わいわい
元気がさきね	みんなの力	ファイト
元気ものがいいね	微笑えみ	と元と元
わくわくするね	ゆるやか	めきめ
ちょっと～である	よろこび	ゆっき
力がいいね	わかわかし	よっしゃー
大切だね	あったかい	リラックス
はじめて知ったね	うきうきした気分	レッツゴー

（出典：井上一郎『「読解力」を伸ばす読書活動』明治図書、2005 年　一部抜粋）

本研究では、これらの取り組みと合わせて、「言葉のたからばこ」に書き留めた言葉を、日常的な活動として日記や生活文等に使えるよう、児童が身につけていきたい言葉として、児童用の言葉のはりねずみを作成した。そのシートに、選び取った言葉を付箋にはり、日記や生活文等で文を書く活動で使っていく。自分が書いた日記等に、使った語彙をみつけ、その箇所にポイントシールを貼る活動をする。この一連の活動で、使用語彙で質を養っていく。また、「言葉のたからばこ」は、「生活の中から言葉を意識的に集め、身近なことを表す語句の量を増やすこと」を目指し以下の流れで取り組んでいく。

①最初の数回は、教師がテーマを提示する。
②慣れてきたら、自分でテーマを設定して取り組む。
③様子を表すことば（擬音語・擬態語等）で例文を作る。
④「使えるようになるといい言葉」で例文を作る。
⑤１日２文作り、２週間に１回程度、点検・コメントによる奨励・助言を実施しご褒美シールを貼る。
⑥年度末に製本し、自分の「言葉のたからばこ」のサブテーマや表紙を各自で考える。

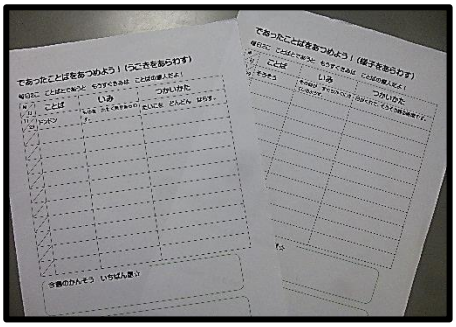


図２「言葉のたからばこ」シート

４　国語科の授業づくりの工夫について

(1)　文学的な文章の授業づくり

言語関係事項を沖縄県教育委員会が作成した「学力向上プロジェクト」、「問い」が生まれる授業サポートガイド(2018)やうるま市実践９項目を参考にした。単元構想では、物語全体を捉えさせる方法として白石範孝(2010)の「物語文の１０の観点」を取り入れる。そこでは、物語を読み解く手法として想像を広げながら読むこと、語のまとまりや言葉の響き等に気をつけさせる。音読の方法として、一人読み、部分読み、グループ読み、たけのこ読み、好きな場面読み、群読として形態を変え、音読記号をいれながら意識して読みを深める。また、個に応じた配慮として事前にルビうちをし、机間指導の際に読みの量を確認する。そして、書き込みの仕方として重要な語句や様子を表す言葉に、サイドラインや中心人物の会話文を色分けする工夫をし、言葉に着目できるようにする。

さらに、個々の想像が広がる支援として、挿絵に「マイ吹き出し」を書き込み、「読みの手立て」をもたせる。

せってい	①　いつ・どこで・じかん
じんぶつ（主語）	②　とうじょうじんぶつ
	③　中心じんぶつ
	④　語り手
じけん	⑤　じけん
	⑥　大きくかわったこと
かんけいづける	⑦　３ぶこうせい
	⑧　お話し図・人物かんけい図
	⑨　一文で書く
	⑩　おもしろさ

図３　物語文１０の観点（白石 2010）

(2) 自分の「考えの形成」及び「共有」に関する指導事項

新学習指導要領「読むこと」における自分の「考え形成」ついて、低学年では、「文章の内容と自分の体験とを結びつけて、感想をもつこと」、中学年では、「文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと」を示し、高学年では、既習の知識や理解した内容と結びつけて「自分の考えをまとめること」が求められている。

また、「共有」について、低学年では、「文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること」、中学年では、「文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと」、高学年では、「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること」を示している。

文学的文章の学習において、大事な文や言葉を書き抜くことで自分の読みの根拠を叙述をもとに明らかにする。また、場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像するために、登場人物は、何をしたのか、どのような表情・口調・様子だったのか等を具体的にイメージしたり、行動の理由を想像したりする。そこで、本研究では、自分の読みの根拠を相互交流活動の中で伝えるために、叙述に即して読むことを目指していけば、子どもたちが自分の考えを豊かにし、自分の体験を結びつけて感想をもち、その思いを伝え合うことで読みが深まっていくのではないかと考える。

(3) 語彙力向上を図る日常的な取り組み

① 読みへの思考を働かす言語技術教具

論理的に考える力を引き出すために、補助教具として昔の道具の写真や生活の様子の写真を用意した。また、文学的文章の読みを深めていく言語技術的な手法として「問答クイズ」や「再話」、「視点を変える」、「ダウトをさがせ」等をし、自分の言葉と表現でストーリーを変えないで読みへの関心を高めながら主体的な学びと対話的な学びの動機付けを持たせたいと考える（写真１）。

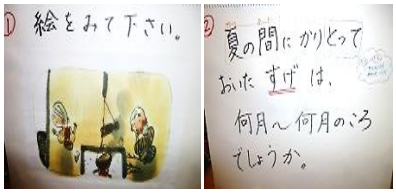


写真１　言語技術教具

② 音や様子を表す作品集をつくる

学校生活で出会った音や様子表す語彙等をスケッチブックを利用し、主語・述語を使いながら短文で書いていく。日直の際に書き、短学活で紹介する。いつでも手に取れる場に提示し、児童同士で交流を育みながら新しい言葉に出会う機会を多くする（写真２）。

写真２ 音や様子を表す作品集

③ 言葉への広がりを持たせる環境づくり

教室に、数種類の辞典や関連絵本等を設置し、すぐ本を読むことができる場を設置する。図書司書と連携し、他教科へもいかせるよう語彙量を育んでいく（写真３）。

写真３　読書環境

④ 言葉に関心をもち意識化を図る「言葉のはりねずみ」

児童への発信を目的にした「言葉のはりねずみ」を作成する。また、「音や様子をあらわすことば」は、児童と一緒に考える。はりねずみのはりの部分に、国語教科書の巻末を利用して「使えるようになろう・気持ちを表す言葉」として、教師が作成する。さらに、児童用のシートも作成し日記や生活文等で使える語彙を児童が探し広げる足場かけをする（写真４）。

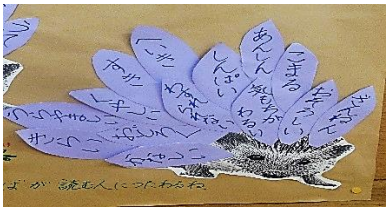


写真４　言葉のはりねずみ

⑤　日常のノート・ナンバーワン

「めあて」に正対した「まとめ・振り返り」の確実な実施を図り、児童のノートのまとめ方がきれいな児童の見本を提示する（写真５）。

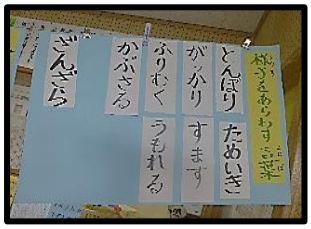
自分の考えをノートに書き出し、黒板の文字を書く他にも自分の思考を残すことの大切さを意識する視点を持たせる。また、児童のノートの工夫を紹介することで、「書く力」を育成する目標とし、自己肯定感が高まる支援・児童同士の学びの共有化を図る【実践９項目７自己評価の実施】。

写真５　児童のノート掲示

⑥　学習環境整備

児童が主体的に言葉のもつよさに感じることができるように、教科書に出てくる大事な言葉や文や文章の構成で活用する言葉を知る言語環境の工夫を図る。

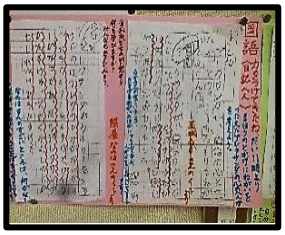
言葉ランドで言葉を養う



言葉の働きに着目する力を育むために、様子を表す言葉を提示したり、話し言葉や書き言葉を提示したりして、知識及び技能を養うようにする。

既習事項・学習の振り返りや欠席した児童が本時の授業に参加できるようにこれまでの学習のあしあとが伝わるようにする。

児童の学習ノートの工夫・国語日記



書くことの抵抗感をなくすために、書き込みの仕方や学習資料を入れるポケットを作成する。書き込みシートの活動で「読む」ために「書くこと」を意識させる。

「書くこと」に慣れさせるために、「書かされている感」のない国語日記を書く。授業の評価や児童同士で考えや感想を伝え合う。（相手意識）

Ⅵ　指導の実際

１　検証授業Ⅰ

(1)　単元名　　音読発表会をしよう　～「むかし話紙芝居」のはじまり！はじまり！」～

中心教材名　「かさこじぞう」　いわさき　きょうこ　文・むらかみ　ゆたか　絵

(2)　単元の目標

○書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと。　B(1)オ

○語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読すること。　C(1)ア

◎場面の様子について、登場人物の行動を中心の想像を広げながら読むこと。　C(1)ウ

○昔場や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり発表し合ったりすること　伝(1)イ(ア)

○言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気づくこと。　伝(1)イ(ウ)

(3)　本研究テーマとの関わり

本研究では、「語彙を豊かにする学習指導の工夫」～「ことばのたからばこ」を活用した言語活動の充実を通して～とテーマ設定し、言語活動に必要な「身近なことを表す語句を増

やし、話や文章の中で使う育成」と「語彙を豊かにする児童の育成」を目指している。

今回は、「文学的文章の学習において、「言葉のたからばこ」に言葉を書き留めながら、習得した言葉を使うことにより、言葉を手がかりにした語彙や言語感覚の動作化等を通し、自分の考えや思いを適切に伝え合う活動ができるであろう。」の検証を行う。

授業検証では、「場面の様子や登場人物の性格や行動、会話などを手がかりにしながら、教師と児童の発問や問い返し、動作化や挿絵等から想像できる考えや思いを意識させることを通し、自分の好きな場面の根拠をグループで伝え合い、児童自らが新たな考えをもち、昔話のよさに気付き感想を伝えあうことができるであろう」の検証を行う。

(4) 単元について

① 教材観（省略）

② 児童観（省略）

(5) 指導観

本時では、昔話特有の言葉や表現による語り口調や音や様子を表わす独特な擬態語・擬声語などに着目し「場面を比べながら読む」音読からする。そこで、じぞうさまは、なぜもちやお飾りを届けたのかを考えることで、印象に残ったことや注目したい語句を日常で使用する語句に置き換えて、動作化等を通しながらじいさまの人柄を読み取っていく。次に、場面を比較できるように、二枚の挿絵で分類する。対比することで、事柄同士の共通点や相違点を見つけることや事柄の順序を考えることで、昔話のよさにせまることができると考える。また、自分で好きな場面を選択することで誰もが参加できる。そこで「なぜかというと」と根拠になる言葉を使うことにより自分の考えが明確になる伝え合う場を設定する。そのグループの中で協議し代表を決め全体の場で交流を通し、言語感覚について吟味する。さらに、グループ協議をした代表を通し、答えた言葉を通し広がる交流をしていきたい。また「言葉のたからばこ」を通した言葉と出会う、問いと出会う意欲につながるよう指導していきたい。

【うるま市具体的実践９項目との関わり（平成３０年度重点項目）】

実　践　9　項　目	本時で授業での具体的な関わり
1．ねらいを明確にした授業の実践	○活動途中や授業の終末にて、叙述の言語感覚にあう動作化や、根拠をもち、自分の気持ちを表す言葉を使い、伝え合うことができたか等「めあて」の再確認をしながら「まとめ・ふり返り」につなげる。
7．自己評価の実践	○本時の「めあて」をふり返り国語日記に、わかったこと・不思議に思うこと等を記述させる。

(6) 単元の評価規準

	関心・意欲・態度	読むこと	書くこと	知識・理解・技能
目標	・昔話や民話に関心をもち､楽しく音読しようとしている。	・場面の様子に着目して登場人物の行動を具体的に想像しながら読むことができる。	・語と語や文と文との続きに注意しながら、昔話のよさが分かるように書き表し方を工夫して書いている。	・伝統的な言語文化に触れ、話のおもしろさ独特の語り口調、言い回しなどに気付くことができる。

（７） 単元の指導・評価計画（全 11 時間）

次		時間	学習活動　学習課題	指導上の留意点	評価
第一次	単元を貫く言語活動―昔話を読もう―	1	学習の見通しを持つことができる。 ○場面の様子や登場人物の行動等で表す言葉に気を付けながら全文を読む。 ○初発の感想を書く。	○学習課題の目標を明確にする。	【関】初発の感想を書くことができる。 （発言･行動観察･ノート）
		2	物語（昔話）の大体がわかる。 ○ばらばら挿絵を並べ替え､誰が何をしていると答えながら、物語の場面を理解する。	○挿絵の効果を利用し、「誰が」「どうした」の文で確認する。	【書】設定と登場人物を場面ごとで整理することができる。 （発言・ノート）
		3	漢字や言葉の意味がわかる。 ○グループで１０の観点をまとめる。 ○書き込みシートに書く。	○書き込みシートにラインや印をいれながら、語と語のつながりや助詞の役割を説明する。 ○句読点も大事な働きをしていることを意識させる。	【書】書き込みシートにラインや印を入れることができる。 （発言･ノート等）
第二次		4	好きな場面を選び、紹介カードに書くことができる。 ○5 枚の挿絵を活用し、全体で好きなランキングをし、自分の好きな場面の根拠を考える。	○自分の好きな場面を通し､「なぜかというと～だからです｡」の文で書く。	【書】紹介カードに書くことができる。 （発言・ノート）
		5	「誰が」「何をして」「どうなったか」一文で大体の段落読みができる。 ○挿絵をみながら、「誰が」「何をしているか」児童へ問い返しながら、考えさせる。	○5 枚の挿絵をもとに、物語を構成図にわけ、大まかなあらすじを捉える。 ○場面ごとに「～が～どうなった場面」とペアーで考える。	【読】登場人物の行動を具体的に想像しながら読んでいる。 （ノート・交流） ＜問答ゲーム＞
		6	音読を工夫することができる。 ○音読記号を書き込み練習する。 ○じさまがしたこと・ばさまがじたこと ○教科書デジタル教材の朗読等を参考にしながら言語のイメージを働かせる。	○配役を決め、登場人物の様子を文脈から想像し、音読記号を入れながら読みの練習をする。	【読】大事な言葉を落とさずに読んでいる。 （ノート・発表） ＜ダウトを探せ＞
		7	じさまとばさまがよいお正月をむかえられたわけを考えることができる。 ○１の場面の写真と４の場面の写真を提示し、じさまとばさまは､幸せか､不幸せか議論する。 ○本文から読み取れること､挿絵から読み取れることをプラス・マイナスで分けて読む。	○「視点を変えて読む」楽しさを体験する。 ・「びんぼう」という言葉を連想して、言葉の意味を表す類義語や挿絵から伝わる様子等から、二人の性格を想像する。 ・不幸と思う児童・幸せだと思う児童の考えを共有し対比の関係を知る。	【読】挿絵の様子や自分の解釈読みを結びつけて、感想をもつことができる。 （発言･ノート） （言葉のたからばこ）
		8 本時	**３の場面と５の場面の好きな場面の理由を伝え合い、昔話のよさを見つけることができる。** ○５の場面のよさ ○３の場面のよさ ○動作化を通し、叙述の言語感覚を味わう。	○「視点を変えて読む」楽しさを体験する。 ○交流を通し、自分の考えと違う感覚を体験し､昔話への良さを気づかせる。	【読】昔話を視点を変えて読むと昔の様子や暮らしがわかる （ノート･発言） （行動観察）
第三次		9 10	紹介したい昔話の紙芝居を作ることができる。 ○並行読書をしてきた昔話の中から好きな昔話を選んで「昔話紙芝居」にまとめる。	○並行読書で、様々な昔話を読み、好きな本や興味をもった本を選んでいる。	【書】好きなお話や興味をもった本を選び､「昔話紙芝居」を書くことができる。 （行動観察）
		11	昔話紙芝居をすることができる。 ○学級で「昔話紙芝居」にする。 ○学級で読み合い感想を付箋に書き知らせる。 ○振り返りをする。 ○群読をする。	○学級で「昔話紙芝居」を楽しむ。 ・仕上げることができない児童は、紹介したい昔話を読み聞かせする。	【読】昔話のおもしろさを紹介し合い、感想を伝え合うことができる。 (行動観察・付箋)

(8) 本時の指導

① 本時の目標： ３の場面と５の場面の好きな場面の理由を伝え合い、昔話のよさを見つけることができる。

② 本時の観点別評価規準

評価の観点	C　読むこと
評価規準	じいさまの人柄という観点から昔話のおもしろさを伝え合うことができる。
評価方法	授業内：じぞうさまの気持ちを考える・ペアーや全体・動作化 授業後：ノート、振り返り

③「めざす子どもの姿」の実現に向けた授業改善（教材・発問・問い返し・過程の工夫等）

場　　面	工夫点（発問等）	子どもの姿
主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ		
好きな場面を書く場面	〔指示〕自分の好きな場面を、理由をいれながら書きましょう	「自分が好きな場面は○の場面です、なぜかというと～だからです。」と書く。(児童)
他者との交流を通し、「問い」が生まれる自分の考えを広げ深める		
話し合いの活動	〔指示〕昔話の言葉の表現と自分の好きな場面の想像を広げて考えてみましょう。	簡単な感想を声に出し、場面を比べて読む。自分の考えから、新たな発見をする。(児童)
学びの過程をふり返り、新たな「問い」をもつ		
まとめの場面	〔指示〕今日の授業を終えて、何か気がついたことはありますか？	場面を比較しながら、読むことで昔話の言葉のおもしろさに気づくことができる。

④　本時の仮説：自分の好きな場面を伝え合う場面において、児童同士が言葉の見方・考え方を働かせながら、新たな昔話の楽しさに気づくことができるであろう。

⑤　展　開

過程	学習活動・内容・発問等	○教師の支援と留意点★書き込み・書き換え 予想される児童の反応	■授業仮説の検証 ◇評価規準　○留意点　★支援
導入 8	**１．音読をする。** **２．前時までの学習を振り返る。** <問題提示> **登場人物の様子をふりかえよう。** T:誰が、どうしたで考えるよ。 **３．学習課題を確認する。** めあて　**すきな場面を伝え合い、昔話のよさをみつけよう。**	○好きな場面を（３・５）を読む。 ★姿勢や口形等に注意してはっきりした発音で話す。【言語事項(1)ア】 ○前時で学習したことを言葉の意味やまとまりに気をつけ、書かれている内容をイメージしながら音読させる。 C:1：じいさまが、かさを　かぶせる。 C２：じいさまが　かぶせる。 C3：じぞうさまが、かぶる。	○机間指導をしながら、児童の読みを評価する。 ＜行動観察＞ ★漢字の読みが苦手な子には、事前にルビ振りをする。 ◇主語と述語の関係がわかる。 【実践９項目：１・２】 ■授業仮説　① 自分の考えに根拠を持ち伝え合おうとする言語活動ができる。 ＜観察・発言・ノート＞
展開 27	**４．場面交流をする。** T：ランキングでわかった好きな場面の仲間同士わかれましょう。	○交流する場面で読む文の確認をする。 私は○の場面が好きです。 なぜかというと～だからです。 ○場面「３」と「５」では、どちらの方がお気に入りかを尋ね、自分の考えの根拠をもち、友達の考えの根拠を比較しながら感想をもつ。	

	５．文章カードや挿絵を分類する。 ・時の設定もだ ・独特な擬態語・擬声語 ・場面で変わること ・リズムのよい表現 （かけ声・歌） ※「言葉のたからばこ」の気持ちを表す言葉や様子を表す言葉等を活用する。 **６．グループで考えた叙述に合う地蔵様がお正月の贈り物を運ぶかけ声にあう言葉を体感する。** **（動作化）** **（言葉のイメージ）** Ｔ：グループで考えたかけ声を体感してみましょう。どんなイメージをもちこの場面にあうか考えよう。	○巻き短冊の「がっかり」するの類似語や動作化をいれ、様子を理解する。 ○言葉のたからばこで言葉を整理する。 ○グループで考えた、じぞうさまがそりをひくかけ声の場面に合うかけ声を聞き合う。 ※言語感覚（正誤・適否・美醜等） ・「うんとこしょ　どっこいしょ」 ・「よいしょ　よいしょ」 ・「ワッショイ　ワッショイ」 ・「わっせ　わっせ」 ・「うんとこしょ　おもたいな」 ・「じょいやさ　じょいやさ」 Ａ児：「うんとこしょどっこいしょ」じゃ軽いかけ声に感じるよ。 Ｂ児：「よいしょ　よいしょ」じゃお祭りみたいだよ。」 Ｃ児：「ワッショイワッショイ」は元気があるけど、じぞうさまぽくないよ。」 Ｄ児：「うんとこしょ重たいな」かけ声に重たいなって話し言葉入れたら変でしょ。」 Ｅ児：「やっぱり、夜中だから低い声でかけ声をしたと思うな。」 Ａ児：「やっぱり、じょいやさじょいやさがいいな。」 Ｃ児：「ホントだ。よく考えているな。作者のいわさききょうこさんは。」	★文章カードや黒板上で挿絵等を移動させながら、可視化のための読みの手立てを持たす。 ○実際の重さを、用意し疑似体験させる。Ｔ２補助 ○「もし、自分がじぞうさまなら・・」とグループで考えた、かけ声で台車を引かせる。 【実践９項目：３・４】 ■授業仮説　② 日常で表す言葉で言い換えて台車を引く場面に合う言語感覚を広げることができるか。 ＜観察・発言・ノート＞ ・台車に乗る役をＴ２に依頼する。 【実践９項目：５】
まとめ１０	**７．振り返りをする。** Ｔ：振り返りをします。今日の学習で、新しくわかったこと発見したことを書きましょう。	**まとめ** **昔話は、昔の様子や昔の生活の言葉を知る楽しさがある。** ○振り返りと自己評価を行う。 ○教師の話を聞き、今後の確認をする。	◇場面を比較しながら読むと、昔の生活や様子が独特な擬態語・擬音語などで例えられるから、よさに気付くことができる。 Ｃ（１）エ　B(1)ウ （ワークシート・行動） 【実践９項目：６・７】

２ 仮説の検証（検証授業Ｉ）【具体仮説(1)】

文学的文章の学習においての授業について児童の学習ノートや行動観察、自己評価、児童の感想等をもとに検証する。

(1) 文学的文章の学習において、「言葉のたからばこ」に書き留めながら、習得した言葉を使うことにより、言葉を手がかりにした語彙や言語感覚の動作化等を通して、自分の考えを適切に伝え合う活動ができるであろう。

①「物語１０の観点表」における読み取りの検証【第２・３時】

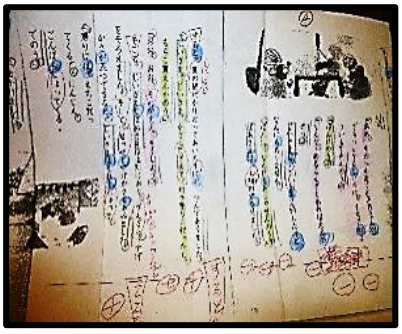


写真６　Ｋさんの書き込みシート
（読み取りの足跡をどんどん残すことを賞賛）

【授業の様子】
・児童は、挿絵から伝わるイメージから昔話の世界を味わっていた。そこで、登場人物の行動を表す文章を一文一文読むことで、登場人物の心の動きを感じとり、明るい感じ(＋)、暗い感じ（－）と文を読む姿が見られた。

【グループでの交流】

Ｎ児「この場面は、挿絵は暗い感じなのに、文では(－)から(＋)になるから、読むと楽しいね。」
Ｙ児「ほんとだ。」
Ｒ児「ふしぎだね。」
と挿絵と文をおいながら伝え合う姿が見られた。
Ｊ児「大事な言葉だけに短く線を引くのがわかりやすいよ。」
とアドバイスをする交流も見られた。

② 自分の考えや気持ちの根拠をもって書く検証【第４時】

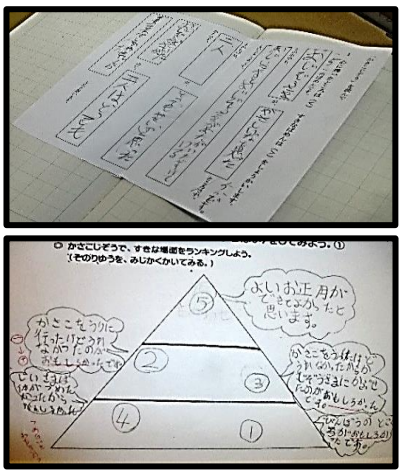


写真７　好きな場面の理由シート（上）

すきな挿絵ランキングでの思考の整理（下）

【授業の様子】

・児童は、物語の入り口を挿絵や写真等から入る子、文章表現から入る子、叙述の言語感覚イメージから入る子に分かれていた。挿絵や写真等では、色使いの明るい雰囲気から入る姿が見られた。文章表現では、会話文から伝わる中心人物の心情に触れる姿が見られた。叙述の言語感覚では、動作をイメージ化した姿が見られた。また、全体の共有の場として好きな挿絵ランキングで思考の整理を図で表し、吹き出しに理由を書く練習をした。

【全体での交流】

H児「わたしは、おじぞうさまは、やさしいなとおもいました。なぜかというと、じさまはじぞうさまが寒そうにして助けているから、二人に、助けたお礼をしたいと思ったからです。」

N児「ぼくは、じさまが、一生懸命大晦日の日に何か売れる物がないか考えている１の場面の挿絵が好きです。」

教師「文章や挿絵から好きになる場面が見つかりますね。今日の忘れちゃいけないアドバイス言葉は、理由を説明するときは『、なぜかというと～だからです。』という文をかきます。」

とまとめへとつなげることができた。

③ 言葉にこだわって書く検証【第６時】

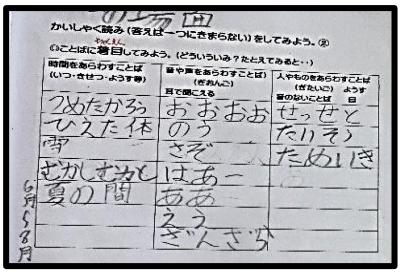


写真８児童ｋ　言葉に着目した思考の足跡

（授業の様子）

文及び文章の構成で「音や様子を表す言葉＜擬音語・擬態語＞の既習事項の発展として、叙述を追いながら、擬音語・擬態語を分けて「言葉のたからばこ」に書き留めていった。じさまの言葉や人の動きやもので、じさまが気持ちを表す様子だから擬態語と知り驚く姿が見られた。その後、「ありゃせんのう」「ほんにのう」とペアーで昔話の語りのリズムや時を表す言葉、人の動きを表す言葉等を文章の中からみつけながら会話文をやりとりして楽しむ姿が見られた。言葉を補うために体を使って文章に合う言葉と語感を連動して動作化することにより、言葉への興味関心が育ち、言語の適否を少しずつ理解していった。

④　言葉にこだわった言い換えで書く検証【第７時】

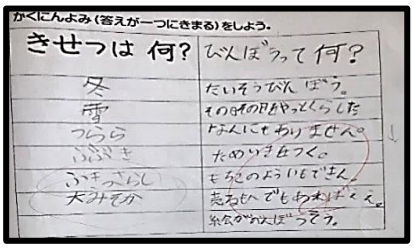


写真９児童Ｓ　言葉をたとえた思考の足跡

【児童の感想】

・ 冬を表すことばで、「雪」「つらら」「ふぶき」「ふきっさらし」「おおみそか」を使うことを知りました。

・「貧乏」のイメージが「その日その日をやっとくらしていました」とか「なんにもありません」の言葉で表すことを納得しました。

・「その日その日」ってどのように過ごしているのかな。

・「年越し」と「おおみそか」が同じ日なんだ。驚いた。等

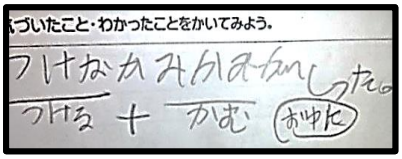


写真１０児童Ｓ　複合語と動作化での一連の思考

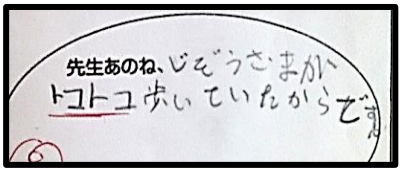


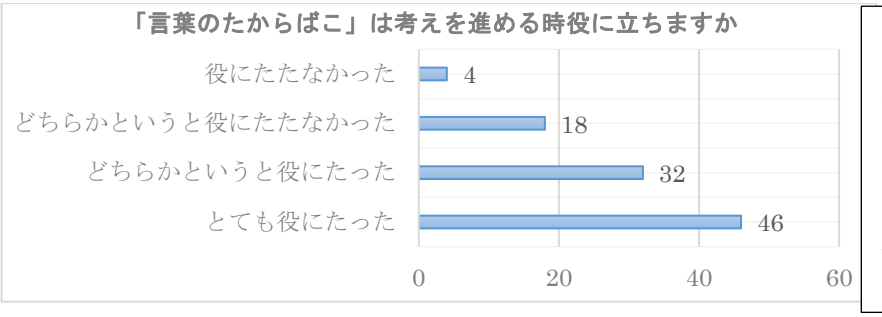
写真 11 児童Ｍ　擬音語を含む思考の足跡

【考察】語彙を豊かにする学習指導として、言葉をたとえる表現を文章から読み取る学習をした。その言葉を「言葉のたからばこ」で整理し、児童の学習の深まりを調査した。「冬を表す言葉に着目してどうでしたか」では、不思議に思った児童６人(25%)驚いた児童１１人(46%)納得した児童７人(29%)であった。「貧乏を表す言葉に着目してどうでしたか」では、不思議に思った児童４人(17%)驚いた児童８人(33%)納得した児童２４人（50%）であった。このことから、一つ一つの言葉に着目する機会を多く持つことで、言葉への興味を持つ児童が育つことが考えられる。また、「言葉のたからばこ」の感想の中に、「つけなかみかみ」の文に対し「つけるとかむ」の複合語に驚く感想(写真 10)、動作化を通し、さらに新たな言語感覚を養い言葉を楽しむ感想、文章を読み、「じぞうさまが「トコトコ」歩いたからです。」地蔵様の歩いた驚きの感想で擬音語を使う児童も見られた(写真 11)。このことから、一文一文深く読むことで、新たな言語感覚が豊かに育っていること考える。

⑤　叙述の言葉を手がかりにした考えが深まっていく検証【第８時】

教師の発問	児童の姿
○なぜ、１日だと思いますか？	A児：だって、１の場面で朝起きてから考えているじさまがいる挿絵がある。 B児：ちょうど、そこで４時間くらいだよ。
○「日もくれかけました」の「も」はだれと一緒ですか。	A児：「も」は同じことを表す意味だから、じさまもです。 C児：ばさまもだよ。いっしょにかさこをあんだから。 D児：「じさまの心もくれかけました」だよ。 A児：話し言葉もあるよ。 B児：「とんぼりとんぼり」は、擬態語だよ。 C児：泣いている感じがする。 B児：「そのうえ」ともあるよ。（叙述から発見する。）
○「がっかり」ってどんな感じかな？	D：「たとえば、宝くじが外れたとき。」（頭を上にする動作をする） C児：この動作は、あわないよ。だった、かさこが売れないし、正月買い物も買えなかった場面だよ。 D児：「がっかり」ってなんか「期待を裏切られた感じがする。（下をむいて動作化をする） A児：最悪だな、下を向いて歩くくらいだから。
○そうか、それでは、じさまが家に帰ってきた時、ばさまはがっかりしていましたか？	A児：「ほめた」つめたいのに、「えらいね」って A児：ご先祖様が　いいことしたねってみている気がする D児：「つるの恩返し」みたいだね。

⑥　「言葉のたからばこ」活用



【考察】左のアンケートの結果から、78%(22)が言葉を習得し活用していく考えに役立つと考えている。授業においては、写真や挿絵、対話等で言葉を付け足したり捉え直したりして、言葉から連想することで、より適切な言葉と出会わせていくことが必要だと考える。

【具体仮説(2)】日常的な取り組みとしての「言葉のたからばこ」の活用について検証する。

(2) 日常的な場において、言葉を集め「言葉のたからばこ」へ書き留めることを通して、新たな言語感覚を養い、言語活動で使うことにより語彙を豊かにすることができるであろう。

【取り組みの様子】名詞や擬音語・擬態語等をどんな言葉とつなげて文を作るのか、言葉をさがす・集めることに児童は、四苦八苦していた。しかし、一つの言葉がひとつの意味をもつのではなく、言葉のイメージの広がりがあることを伝えると、言葉の豊かさと出会う図書資料等を活用することで解決策を持つ姿が見られた。

【考察】言葉に触れる楽しさが、いつでもみえるように、見つけた言葉を、「言葉のはりねずみ」に増やしていく活動をした。それを使い、自分で書き留めた言葉とつなぐと、短い文作りがしやすいようである。また、使い方の文では、言葉の意味を考えて、増やすことができてきた。

児童は、「言葉のはりねずみ」を効果的に活用し、付箋に書き留めることを楽しむことで、家庭学習でも「使いたい」「短い文づくりを、身近な人と考えてみたい」と意欲がわき、学んだことが使えないか気付き始めたと考える。

写真 12　児童ｋさんが作成した「言葉のたからばこ」

3　検証授業Ⅱ：平成３１年１月 24 日(木)実施

(1)　単元名　　八　お話を読んで、しょうかいしよう

(2)　中心教材名　「アレクサンダとぜんまいねずみ」レオ＝レオニ　文　谷川俊太郎　訳
～レオ＝レオニ絵本のショーウインドウ～

(3)　単元の目標

◎場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと　【Ｃ(1)ウ】
○文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。　【Ｃ(1)エ】
○自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること　【Ｂ(1)イ】
○文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気づき、正すこと。　【Ｂ(1)エ】
○文の中における主語と述語との関係に注意すること。　【伝国(1)イ(カ)】

(4)　本研究テーマとの関わり

本研究では、『語彙を豊かに育てる学習指導の工夫』～「言葉のたからばこ」を活用した言語活動の充実を通して～とテーマ設定し、言語活動に必要な「身近なことを表す語句を増やし、話や文章の中で使う育成」と「語彙を豊にする児童の育成」を目指している。

今回は、具体仮説２「日常的な場において、「言葉のたからばこ」へ書き留めることを通して、新たな言語感覚(正誤・適否・美醜等)を養い、言語活動で使うことにより語彙を豊かにすることができるであろう」の検証を行う。印象に残った一文の書き抜きを通し、その理由やお話しの概要などを入れ「本のショーウインドウ」を作って紹介する方法をとる。はじめに「レオ＝レオニの絵本でお気に入りの好きな場面の理由を考える」次に「挿絵をヒントに短文であらすじをまとめる」最後に「登場人物の会話や行動に着目し、お話の続きを考える」ことなどを通し、「言葉のたからばこ」に書き留めた表現を引用しながら「本のショーウインドウ」を作ることで、言語活動で使う語彙を豊かにすることができるであろう。

(5)　単元（教材）について

①　教材観（省略）
②　児童観（省略）
③　指導観

本時では、児童一人一人が主体的に読む学習を行えるようにしたい。そのために、単元ゴールを明確にする。また、印象に残った言葉や注目した表現を引用しながら、言葉の正誤・適否・美醜などについて吟味する。次に、グループでの交流の場を設け、児童自らが自由に交流し合えるようにする。その際、児童たちには相互評価をするための観点を提示し、アドバイスカードを届ける。グループでの交流活動の中で、登場人物の行動に着目して読み、友だちと伝え合う活動を通して、言語活動に必要な語彙を豊かに育てるための読む力を育てたい。

【うるま市具体的実践９項目との関わり（平成３０年度重点項目）】

具体的実践９項目	本時における具体的な関わり
１ねらいを明確にした授業の実践	○学習計画表を提示し、授業開始時の「めあて」の確認をする。 ○活動途中や授業の終末にて、登場人物の性格や行動に触れ、めあてを再確認しながらまとめ・ふり返りにつなげる。
７自己評価の実践	○「交流感想」「不思議さ」「おどろき」「納得」等を記述させる。

(6) 単元の評価基準

	国語への関心・意欲・態度	読むこと	書くこと	言語についての知識・理解・技能
目標	・レオ＝レオニの作品に興味をもち、進んでレオ＝レオニ作品を読んだり、大好きな場面の紹介文を書いて伝え合ったりしようとしている。	○場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと ○文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。	○自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。 ○文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気づき、正すこと。	・文の中における主語と述語との関係に注意すること。

(7) 単元の指導計画・評価へ計画（全 16 時間）

次		時間	学習活動　学習課題	指導上の留意点（☆）	評価
第一次	単元を貫く言語活動　―レオ・レオニの絵本を読もう―	1	○学習の見通しを持つ。 ・「レオ＝レオニ絵本のショーウインドウを作って、お話を紹介しよう」というめあてを知り、学習計画を立てる・初発の感想を書く。	☆単元のとびらや「てびき」から学習の見通しをもち、「絵本のショーウインドウ」を開くために、レオ＝レオニの作品を提示する。	【関・意】単元の見通しをもって学習に取り組もうとしている。 （行動）（ノート）
		2	○漢字やわからない言葉の意味などを調べ、声に出して読む。	☆書き込みシートをみて、教科書に、中心人物や会話文の印をつける。	【関・意】分からない言葉を見つけ、その意味を調べようとしている。 （行動）
		3	○「物語１０の観点表」を見て、場面を見通す。 ・いくつの段落があるか。	☆「物語１０の観点表」を見ながら場面を見通す。	【関・意】お話の図を書く。 （行動）（ノート）
第二次		4	○教科書を一人読みして、アレクサンダの気持ちを表す言葉や行動を書き出す。 ・挿絵に、吹き出し付箋を張り、アレクサンダの気持ちを考え、文を書く。	☆アレクサンダの気持ちを表す言葉や行動を書き出す。 ☆吹き出し付箋を配り、アレクサンダの気持ちを考え、文を書く。	【読】アレクサンダの気持ちを表す言葉や行動を書き出すことができる。 ・マイ吹き出しを書くことができる。 （観察・付箋）
		5	○「だれが」「何をして」「どうなった」のカードを用いながらお話のあらすじをまとめる。 ・一文で書く。 ・７枚の挿絵からわかることは何？	☆各場面の中心となる学習課題を通して、想像しながら読む。	【言】主語と述語との関係を注意し、文や文章を読んだり書いたりしている。
		6	○第１場面から第３場面のアレクサンダの行動や気持ちの変化を読み取る。 （Ｐ118～P123・4Ｌ）	☆アレクサンダを中心にして行動や気持ちの変化をウェビングにして書きまとめる。	【読】各場面のできごとや、アレクサンダの気持ちや行動の変化に着目している。 （ワークシート）
		7	○第４場面から第５場面のアレクサンダの行動や気持ちの変化を読み取る。 （Ｐ123・6Ｌ～P125・8Ｌ）	☆第４場面から第５場面まで音読し、「ふしぎな話」とはどんな話であったか読み比べる。	【読】「ふしぎな話」を聞きアレクサンダの心の変化に気づくことができる。 （ワークシート）
		8	○第６場面をくわしく読み取る。 （Ｐ125・10Ｌ～P127 まで）	☆アレクサンダの心の様子を「行動」「気持ち」「様子」「願い」のウェビングをグループでまとめる。	【読】ウェビングにまとめることができる。 （ノート）
		9	○第６場面をくわしく読み取る。 （Ｐ128～P130・3Ｌ）	☆アレクサンダの心の様子を「行動」「気持ち」「様子」「願い」のウェビングをグループでまとめる。	【読】ウェビングにまとめることができる。 （ノート）
		10	○第７場面をくわしく読み取る。	☆アレクサンダの「おそかった」「おもい心」の心の動きに着目する。 ☆夜明けまで踊り続けた二匹の気持ちを想像する。	【読】アレクサンダの心の動きが分かる様子から気づくことができる。 （ノート）
		11	○「アレクサンダとぜんまいねずみ」で好きな場面を選び、あらすじを百字程度で書く。 ・気に入った場面の一文を書く。	☆あらすじの内容をまとめる際には、挿絵３枚を選び、挿絵から誰が何をしてどうなったお話なのかをまとめるようにする。	【読】「アレクサンダとぜんまいねずみ」の好きな場面を見つけながら、登場人物の行動を中心に想像を広げて読んでいる。 （一文カード・百字マス）

第三次		12	○「アレクサンダとぜんまいねずみ」の７の場面の続きを百字程度で書き、友だちと交流する。	☆アレクサンダとぜんまいねすみの会話文や様子を表すことばを書き入れるようにする。	【言】お話の続きを書くために、「言葉のたからばこ」にかきとめた言葉等で使い文を作っている。 （絵本ショーウインドウ） （評価カード）
		13	○「レオ＝レオニ絵本ショーウインドウ」で紹介する絵本のあらすじと感想を百字程度でまとめる。	☆誰が何をして、どうなったお話なのかをまとめるようにする。	【読】好きな作品のあらすじを百字程度にまとめている。 （絵本ショーウインドウ）
		14 本時	○「レオ＝レオニ絵本ショーウインドウ」で紹介する絵本のお話の続きを自分で考え、友だちのアドバイスをもとに、お話を読み返し手直しをする。（百字程度）	☆登場人物の気持ちを表す言葉を選んで書くようにする。 ☆絵については、図画工作科の学習と関連させて作成している。 （題名、副題、作者、訳者、出版社）	【書】お話の続きを書くために、「言葉のたからばこ」にかきとめた言葉等で使い文を作っている。 （絵本ショーウインドウ）
		15 16	○「レオ＝レオニ絵本ショーウインドウ」の振り返りをし、友だちと交流する。 ○学習の振り返りをする。	☆友だちの書いた文章を読み、よいところを見つけて互いに伝え合う。 ・「○○の言葉がいいです。なぜかというと～だからです。」 ・「主人公の○○は、なぜ○○と思ったのか不思議です。」等	【読】学習を振り返り、友だちの作品のよさを認め合っている。 （絵本ショーウインドウ）

(8) 本時の計画（１４/１６時間）

① ねらい

グループで感想交流を通して、お話の続きを読み返し、より適切な表現を考えることができる。

② 授業仮説

お話の続きを書き、グループで交流する場面において、相互評価し合う活動を通して、言葉の正誤・適否・美醜等について吟味し、より適切な表現を考えることができるであろう。

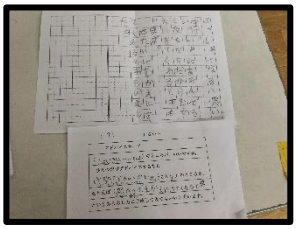
③ 本時の観点別評価規準

評価の観点	B「書くこと」
評価規準	「言葉のたからばこ」に書き留めた言葉等を参考にして、お話の続きを書き、感想を交流・評価し合う中でより適切な表現で書くことができる。
評価方法	授業内：観察・机間指導 授業後：ノート、「レオ＝レオニ絵本のショーウインドウ」の提出

④「めざす子どもの姿」の実現に向けた授業改善（教材・発問・問い返し・過程の工夫等）

場　面	工夫点（発問等）	子どもの姿
主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ		
作品や「言葉のたからばこ」などから引用してお話の続きを書く場面	〔指示〕 印象に残った場面や「言葉のたからばこ」に集めた言葉等を引用しながらお話の続きを書きましょう。	「言葉のたからばこ」等にある中で、「様子や気持ちを表す言葉はどれか」を考える。 （個人）
他者との交流を通し、「問い」が生まれる自分の考えを広げ深める		
感想を相互評価し、適切な表現を考える場面	〔指示〕 感想を読み合い、より適切な表現がないかグループで相談しましょう。	感想を相互評価する中でより適切な表現を相談する。 （グループ）
学びの過程をふり返り、新たな「問い」をもつ		
本時のまとめの場面	〔指示〕 今日の授業を終えて「わかったこと」「気づいたこと」「交流しての感想」をまとめましょう。	交流を通して、より適切な表現があることや言葉の例え方があることに気づくことができる。 （個人）

⑤　展　開

過程	学習活動・内容・発問等	予想される児童の反応等	■評価規準 ○留意点 ★支援
導入 （５）	１．前時までの学習を振り返る。 ２．本時のめあてを確認する。 お友だちのアドバイスをもとに、お話を読み返して手直しをしよう。	○「読書のアニマシオン」的な活動で「アレクサンダとぜんまいねずみ」の「ダウトを探せ」をし、読みの意欲を高める。	○読みの確認をする。 【実践９項目：２】 【実践９項目：１】
展開１ （３） 展開２ （７） （３） 展開３ （５） 展開４ （１２）	３・音読をする。 ４．百字カードにお話の続きを書く。（個人） ５.「アドバイスカード」の書き方を全体で確認する。 （教師） ６．友達の作品を読む。 ７．お友達のアドバイスを生かして、お話を手直す。 	○２～３人で、たけのこ読みをする。 ○「言葉のたからばこ」に書き留めていない児童は、「言葉のはりねずみ」の表から見つける。 ○書き進められない場合は、記述量を文の数で示しながら助言する。 ・「はじめ」３文 ・「中」　　６文 ・「終わり」４文 ○電子黒板をみる。 ・アドバイスがあったらカードに書く。 ・受け取った「アドバイスカード」に、お話の付け足しや手直しをするところはないか丁寧に読み返す。 ○友達の「アドバイスカード」を参考に言葉のつけたしや手直しをする。 R児:「主人公の言葉に、気持ちを表す言葉をいれたらどうだろう。たとえば「力を合わせて」とか。」 （『スイミー』を読んだ友達へ） K児:「楽しさを表すために、絵本のくりかえしを使ったらどうかな。たとえば、『さかなはさかさな』とか。」 （『さかなは魚』を読んだ友達へ）	○２～３人で一文読みをする ○「言葉のたからばこ」の活用も促す。 ○机間指導しながら声かけをする。 ○「アドバイスカード」のポイントを提示する。 ・モデルの文体をまねながらかけるようにする。 ・黒板提示（見本） ○丁寧に読み返しながら読むように、机間指導をする。 ○言葉のたからばこの活用を促す。 ○机間指導しながら声かけをする。 ・句読点やかぎ、文章の中で正しく使っているか見直している。 （活動様の様子の観察） 【実践９項目：４・５】
終末 （１０）	８．まとめをする。 書いたお話を読み返すことで、手直しなどをすると思いがよくつたわる文章になる。 9．振り返りをする。 Ｔ：振り返りをします。今日の学習で、新しくわかったこと発見したことを書きましょう。	○振り返りと自己評価を行う。 （2～3 名発表） ○教師の話を聞き、今後の確認をする。	【実践９項目：７】 【書】文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気づき、正すこと。 【意・関】（絵本のショーウインドウ・観察・ノート）

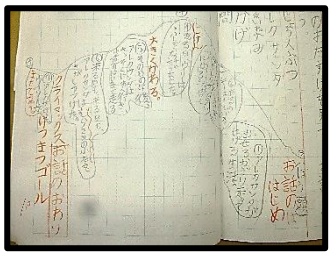
4 仮説の検証（検証授業Ⅱ）【具体仮説(1)】

「アレクサンダとぜんまいねずみ」の学習において具体仮説①の検証をする。

(1) 文学的文章の学習において、「言葉のたからばこ」に言葉を書き留めながら、習得した言葉を使うことにより、言葉を手がかりにした語彙や言語感覚の動作化等を通し、自分の考えを適切に伝え合う活動ができるであろう。

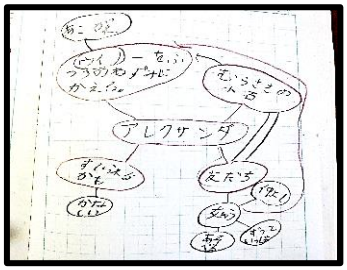
① ノート指導と板書による語彙

取り出した根拠を整理したノート（作品構成図）



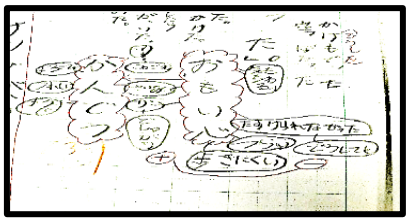
7つの場面を「10の観点表」を活用して、中心人物の変容の「根拠」に捉えて、叙述から書き取っていく姿がみられた。

中心人物の心情や状況のウェビングノート



物語の大体を理解し、中心人物の心情に触れる言葉を追いながら「根拠」をもとに自分なりの「理由」まで考えるノートの足跡がみられた。

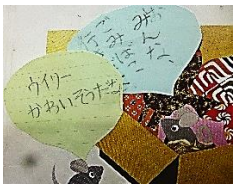
言葉を手がかりにした語彙習得へ



言葉に着目すると「物語がおもしろい」ことを意識してきた。中心人物の心情表現で「『おもい心』って何？」と問いの入り口から、児童の思考が言語化してきた。

「マイ吹き出し」にすることで児童のつぶやきが多くなってきた。

挿絵に当てて、登場人物の気持ちや言葉を想像し共感し、思いを伝える言葉が見られた。

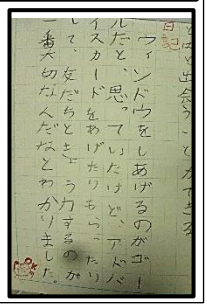


【考察】児童が主語述語・接続語を意識したことで、場面展開の理解が早くなってきた。また、場面の状況変化や大事な言葉にこだわることで、言葉からイメージできる、気持ちを表す言葉を使い、児童自身がつぶやきをつなげ、叙述に合う言葉を考え言葉を伝え合うようになってきたと考える。

② アドバイスカードでの交流

【児童のアドバイス】
- 「わ」は、「は」に直したほうがいいよ。
- 会話文があって読みやすいね。
- 擬音語があって、わかりやすいね。
- 読みづらいので、もう少しきれいに書くといいよ。
- チーズを投げて、猫を退治したところ面白いね。

【児童の振り返りノート】
- 手直しがいやで、めんどくさかったけど、手直しできてよかった。
- 友達の作品を読んで、こういう言葉を使うといいなという言葉がいっぱいあるんだと思った。
- 最初は、感想を伝えることは嫌いだったけど、いがいと楽しかった。
- 絵本のウインドウを仕上げることがゴールだと思っていたけど、アドバイスカードをあげたりもらったりして協力するのが一番大切なんだなとわかりました。



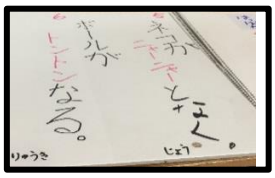
【考察】自分の考えや気持ちを持って、感想を伝え合いたい雰囲気はあるが、どの言葉を使って伝え合ったらよいかで戸惑う姿が見られた。語彙を使うためには、心地よい言葉の使い方を適宜教えていくことで、互いの考えを認め合ったり、比較したりして自分の考えを広げていくことができると感じられた。また、児童の表現のよい作品に触れ合う感想評価の時間の作り方が課題となった。

【交流で見付けた言葉】（児童の感想シートより）
- 仲良く　・それから　・友達おもい　・～だから　・力を合わせた　・～みたい
- かなしい・うらやむ　・うけいれて　・かんしゃ　・願いをかなえる
- しにものぐるい　・平和・おいはらう　・ゆうじょう・ざわざわ　・ありがとう
- ネズミのくらし方を教えるよ　・グーグー　・チャレンジ

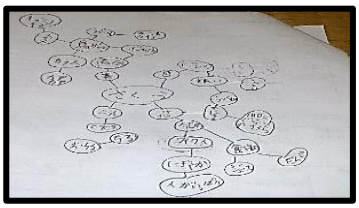
【具体仮説(2)】日常的な取り組みとしての「言葉のたからばこ」の活用について検証する。

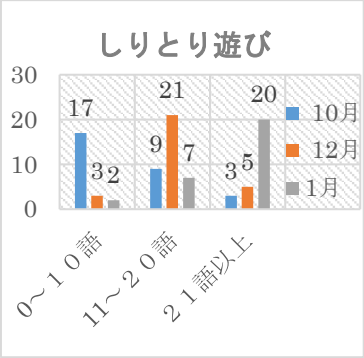
(2) 日常的な場において、言葉を集め「言葉のたからばこ」へ書き留めることを通して、新たな言語感覚を養い、言語活動で使う語彙を豊かにすることができるであろう。

① 日常的な言葉の学習（言葉を養うための取り組み）



【音や様子を表す言葉集】
32 個作ることができた。擬音語・擬態語の意味が分かり、教科書や絵本の中から見付ける姿が見られた。

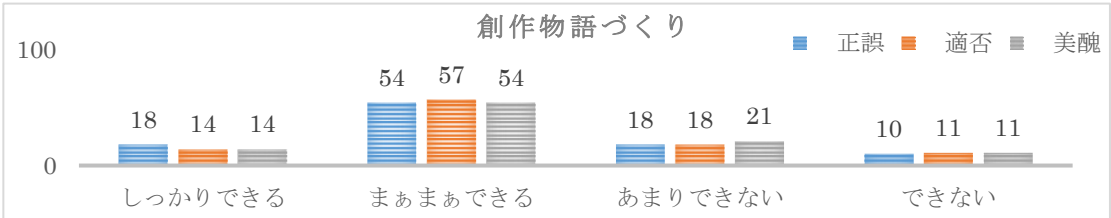




【しりとり遊び】
児童の語彙量を調査するために、3 分間計測して、しりとりをどれだけ続けられるか調査した。10 月は、学級平均 11 語であったが、1 月下旬では 25 語考えが増えてきた。評価Ａ児童は、29 語増、評価Ｃ児童は、21 語増であった。しかし、名詞で行うものだが、話し言葉や動詞、形容詞も書かれていた。

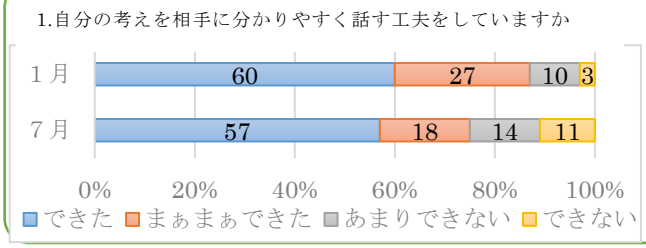
【語彙を磨く連想ゲーム】
「さくら」のイメージから、カテゴリーを 4 つ決めてウェビングした。「花」から 14 語「春」から 8 語。「色」から 7 語。「様子」から 16 語書くことができた。
連想によってイメージを豊かにし、言葉の世界を広げるために有効であった。

② 創作物語づくり

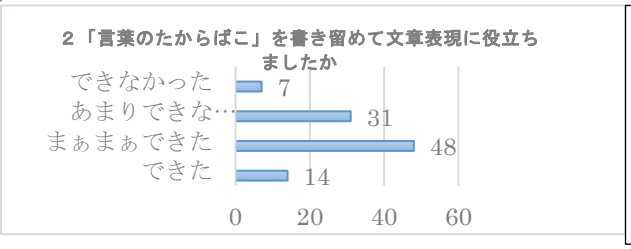


【考察】ほとんどの子が、身近な言葉を使い長い文章を書くようになってきた。様子を入れたり、人物の動きを入れたりして書くようになってきた。児童の作品から例にすると、「ぽかんと口をあける」といった擬態語等の活用を上手く表現する児童が 72%、反面 28%が文章の読み返し不足であった。美醜は、表現のイメージに差が見られ言語感覚の中で差が見られ３２％であった。言語感覚は、時間を重ねて語彙力を養い文章に表現する力につながっていると考える。

③ 児童のアンケートの調査結果

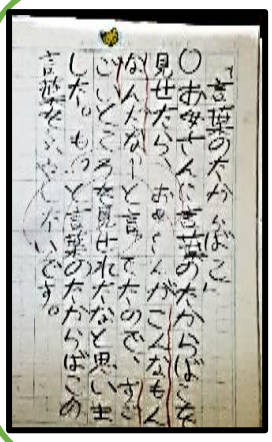


【考察】伝え合う活動では、聞くルールを意識させ、相手の話にあいづちをうつ約束を繰り返し行った。少しずつ変化として、相手意識をもち、支持的風土が身につき始めた。しかし、相手に届く声の大きさには個人差が見られた。今後も支援を要する児童への支援を授業改善に位置付け、自己有用感を育てる。



【考察】「言葉のたからばこ」の言葉を書き留めることで、62%の児童から肯定的な結果が見られた。しかし、38%の児童は活用において理解が不十分であった。学級で集めて作った語彙数は 77１語で、学級平均 34 語であった。多く作った児童は、85 語であった。今度も指導計画に取り込むことで語彙の質を高めたいと考える。

④　自己評価への実施【実践項目 7】・家庭学習と授業の連動【実践項目：8】



【考察】言葉がもつよさを、いかに教師が児童に出会わせていくか方法も大事だと考える。児童の姿の中に、「もっと言葉のたからばこの言葉をふやしたい。」と願う児童をもっと増やしていきたい。言葉から感じた言葉を味わい自分なりの言葉から感じる言葉を広げていくことにより言葉の豊かさを身につけ、言葉への興味・関心が高まっていくと考える。

【保護者の声】
・豊かな表現を身につける活動、ステキです。家でも意識して、子供達に働きかけようと思います。
・日記を書くときに、言葉の宝箱を意識して書く姿が見られるようになりました。
・言葉を使うときに「〇〇は擬態語？擬音語？どっちかな？」と考えるようになった。家でもよくノートに書き留めていました。雨が降っていた日はどんな様子かな？」(シトシト、ザーザー、ポツポツ等) 言葉を使って会話を楽しみました。
・子供が「言葉のたからばこ」を説明したり言葉を使って一緒に会話したりして楽しんでいます。

Ⅶ　研究の成果と課題・対応策

1　研究の成果

(1) 身近な言葉を集める「言葉のたからばこ」の作成・活用を通し、新たな言葉や擬態語等を使い、日記や生活文の表現活動が豊かになった。

(2) 相互交流し合うことで、根拠をもとに自分なりの考えや思いを書き、相手意識で自分の感想や考えを伝え合うことができるようになってきた。

(3) 言葉に着目することで、文章表現を問い直したり、捉え直したりして、適切な言葉を使い言語感覚を養う姿が見られてきた。

2　課題と対応策

(1)「言葉のたからばこ」の作成状況や内容の個人差が見られた。教材研究の時に、子どもの実態把握で「知識及び技能」の既習事項と未習事項の整理が必要である。また、片仮名や促音・拗音の定着を図る言葉遊びや家庭学習の工夫に努める。

(2) 出会った言葉を使い、自分の考えや思いを表現できる場面や教師の発問の工夫が弱かった。意図して言葉を広げる発問の工夫や言葉を書き留めるノート作りを通し、子どもの言語環境を生活の中で磨き、言葉を耕すよう教師も意識していく。

＜主な参考文献・引用文献＞
『小学校学習指導要領解説編　国語編』　文部科学省　東洋観出版社　2018
『見方・考え方』〔国語科編〕　東京学芸大学附属小学校国語研究会　東洋館出版社　2018
『小学校新学習指導要領の展開』国語編　明治図書出版　2017
『国語授業を変える言語活動の「方法」』　白石範孝　文溪堂　2016
『小学校たのしいことばの学習』田近洵一/ことばと教育の会編　教育出版　1993
『うるま市教育研究所研究集録』　うるま市教育研究所　2014・2018
『シリーズ国語授業づくり語彙 言葉を広げる』　日本国語教育学会　東洋館出版社　2017